

提 言 書

平成24年11月14日

桐生市イクメン・プロジェクト推進チーム

目次

I 提言内容

1 “育てる男” を育てる。 P. 2

2 “育てる男” がまちを変える。 P. 6

II 実現に向けて P. 8

III おわりに P. 9

I 提言内容

1 “育てる男”を育てる。

【提言の背景】

“イクメン”とは、ライフスタイルを構成する多様な要素の一つであり、その選択肢の一つであれば良いのではないか。イクメンに定義や決まったカタチ、基準などではなく、自分が選びたい子育てへの関わり方を可能な限り実践できることが重要である。

一方、現在子育て真っ最中の世代は、ロストジェネレーションと呼ばれる世代で、不安定な世の中を生きてきたためか、我々の周囲からも家庭に安らぎを求める傾向を感じる。そんな中、多くの父親が子どもを大事に思い、触れ合いたいと考えているが、仕事などの都合で時間がとれず、父親の育児参加が叶わないという実状がある。

なお、各種のアンケート・意識調査等からも、“イクメン”の認知度の高さが印象付けられる一方で、本来誰もがイクメンであるはずという理想と、そうなれない現実とのギャップが垣間見える。

そこで、まずは、“育てる男”を育てることを提案したい。

【提言1】 子育てしやすい環境をつくる。

(1) 職場環境の改善 5項目

男性が育児休業を取得したい（して欲しい）という意見は多いが、「職場の理解が得られない」「前例が無い」などの理由から、実際は取得できないケースが多いため、取得しやすい環境づくりが必要である。

また、企業と社会の改革が必要である一方で、男性自身が一步踏み出し、働き方そのものを変えていかなければならない。働き方が多様化する中、個人の意向に沿うフレキシブルな働き方ができる企業の方が生産性や効率性の向上が期待できるため、企業もそれを負担（コスト）ではなく、利益（投資）として捉えるべきである。

そして、職場の活性化・モチベーションアップのため、ひいては組織の生産性向上のため、今こそ、組織全体で、上司だけでなく先輩～後輩までひっくるめて、子育て真っ最中の仲間をフォローするときである。

- ①子育てに理解のある職場づくりを推進するため、市役所等の協力を得る中で、市職員による率先した育児休暇の取得など、育児支援制度の活用に係るモデルケースを推進すること。
- ②モデルケースに基づく支援制度の創設を促進するため、市内事業所への働きかけを強化すること。
- ③子育てに理解のある事業所を増やすため、子育てサポート企業としての国の認

定制度「くるみん（次世代認定マーク）」を広く周知すると共に、認定取得に向けた支援を行うこと。

④各事業所及び個人の意識の醸成・喚起を図るため、桐生版育児支援企業並びに個人表彰制度を創設すること。

⑤事業所の姿勢を公約する場を設けるため、“パパVS市内の主要企業の経営者”による、ディベート形式のシンポジウム等を開催すること。

（２）特色ある教育 ６項目

効率性が優先されがちな世の中であって、本質を重視し、自然・文化・人を活かした独自性・地域性のある教育活動を展開していくことは、地域に誇りと愛着をもち、地域に貢献する人材を育てることに繋がるものと考えます。

①小中の連携で教育の幅が広がり、先を見通した教育を可能にするとともに、進学・進級時の精神的ストレスの緩和が期待できる、小中一貫校を設置すること。

②ものづくりを得意とする風土と歴史的背景を踏まえるとともに、学習意欲の向上を図るため、桐生在住者の群馬大学工学部への優先入学枠を設けること。

③地産地消の推進により郷土への誇りと愛着を醸成するとともに、知育・徳育・体育の基礎として健全な心身と豊かな人間性を育む“食育”をより一層推進する観点から、効率性や支出抑制のみに捉われることなく、作り手の顔が見えるような“温かくて美味しい”給食の実現に努めること。

その際、親が給食づくりに加わるなどの独自性を検討すること。

④防犯設備の充実やトイレの暖房便座への改修など、子どもの学校生活におけるセキュリティの強化及び快適性の向上を図るとともに、既に実施済みの全教室エアコン化、液晶テレビ化と併せて、学校環境の良さを広く周知すること。

⑤既存の総合学習や部活動等を補完・連携する形で、往時の織物産業等の隆盛を背景に培われて来た、ものづくり、文化・芸術、スポーツ等の各分野における豊富な人材を活用し、専門的かつ高度な技術的指導体制の導入に努めること。

⑥豊かな自然環境を背景に、青少年野外活動センターにおけるキッズキャンプのような、都会では体験できない本物の自然体験や野外活動について、専門知識を有する地域の人材を活用することで、体験型プログラムの拡充や機会の拡大を図ること。

（３）施設の整備等 ４項目

桐生市民であることの恩恵を実感できるよう、市として物理的なバックアップを強化すべきである。周辺市町村や市外居住者との差別化を図る中で、身近な広場や公園の整備・新設、既存スポーツ施設の照明などの設備の充実、ランドマークである桐生が岡動物園・遊園地及び新里温水プール（カリビアンビーチ）等の魅力を最大限に高め、ふれあう機会、遊びに行く機会を提供する。

①赤ちゃんから小学生までの子どもが、子ども同士はもとより、お年寄り等との異年齢交流を通して、安全にのびのび遊び、学び、読書や科学に触れ、また運

動を通して体を鍛えることができるような、従来の児童館の概念に捉われない、新しくそして桐生らしい「子どものための空間」を開設すること。

なお、施設の運営に関しては、保健福祉会館や遊園地内、空き施設等の利用や放課後児童クラブとの連携など、既存の地域資源を有効活用すること。

②桐生が岡遊園地について、収入の確保による施設の充実及び魅力の向上を図るため、フリーパス制度の導入や夜間営業（イルミネーション装飾）を検討するとともに、市民であることの恩恵を享受できるよう、現状の利用券配布を拡充し、中学生以下の子どもに対する桐生が岡遊園地乗り物券＋カリビアンビーチ入場券がセットとなった年間フリーパスポートを配布すること。

③桐生が岡動物園及び遊園地について、施設の運営に対する市民参画の機会を拡充すること。

④新川公園への軽食等の移動販売を許可するなど、既存施設について利用者目線に立った柔軟な運用及び有効活用を図ること。

（４）経済的支援 ３項目

長引く経済不況により、将来設計がしづらくなっている。こうした将来への不安の緩和や子育てに伴う負担を軽減できるよう、経済的な支援が必要である。

①育児に関わる家計の負担を軽減するため、保育料等について、周辺市町村との格差を是正すること。

②子育て世代が暮らしやすい住環境を整えるため、公営住宅や民間物件を利用し、同世代が集まりコミュニケーションを図ることができるような「子育てアパート」を設定し、入居基準の緩和や優先枠の設定などの優遇を図ること。

なお、モデルケースとして、まずは梅田ハイツを位置付ける。

③子育て世代がいつまでも桐生に住み続けてもらえるよう、住宅や土地に対しての優遇措置や税の軽減措置を図ること。

（５）地域社会と一体となった子育て環境整備 ３項目

より良い子育て環境を整備するためには、子育て世代はもとより、地域全体での取り組みが必要となる。同世代との交流、様々な世代との交流を図りながら、地域で子育てを見守り、地域で育て上げる社会が必要である。

① 地域全体で子育て環境を整備するため、子育てに関する支援団体、市民等のネットワークの構築を図ること。

② 子どもや親のニーズに応じて、遊び場や学習等の情報提供、職業体験や農業体験等の受け入れ調整、人材・地域資源等の橋渡しを担う「子育て支援地域コーディネーター」を育成すること。

③ すべての子どもの教育・指導に関わる人々や親などを対象に、「キッズコーチング検定」や「認定子育てアドバイザー」、「子育て心理カウンセラー」などの子どもの育ちに関する認定試験の受講料等の補助を行うこと。

(6) 情報発信 3項目

多様化する情報媒体により情報が氾濫する一方で、情報弱者にも配慮して、使い勝手の良い、信頼できる情報が求められる。

また、身近で見慣れたものの価値を見直す“きっかけ”や“気づき”を促す、視点を変えた情報提供が必要である。

- ①子育て世代の孤立防止及び活動をサポートするため、親子に優しい施設（公共施設・小売店・飲食店・公園等）に関する情報を収集、一元管理し、利用者目線で使いやすく情報提供（子育てマップやイクメン手帳の作成、ポータルサイトの開設等）すること。
- ②育児を身近なものにするため、働く中での時間の作り方や家庭での役割、家族とのコミュニケーション等に関する具体例を紹介、情報の共有化を図ること。
- ③子育て世代の間のネットワーク作りを支援するため、各支援団体等と連携し、様々なイベント、交流会等を企画し、その情報を多様な媒体（facebook・^{フェイスブック}Twitter・メルマガ・ふれあいメール等）により積極的に発信していくこと。

2 “育てる男” がまちを変える。

【提言の背景】

地域で子どもを育てるということは、あらゆる世代が関わる人生の一大事業である。その子の一生を決めることもあるその時期を、どうせなら楽しく希望あるものにしたい。

そこで、将来に対する強烈な危機感を持つ、われわれ子育て世代の“育てる男”が、子育てと仕事のスキルを活かして、子ども達が社会に羽ばたいているであろう20年後の桐生市を笑って暮らせるまちにしていくなために、キッズバレー構想を提唱し、「桐生市キッズバレー構想」を市内外に宣言することを提案したい。(P. 8 IIを参照)

【提言2】 子育て支援により、まちを活性化させる。

(1) 次世代の育成 4項目

日本全体の問題だが、やはり晩婚化や出産の高齢化の対策は重要である。現在、第3子への優遇策はあるものの晩婚化や出産の高齢化が進む状況では実効性が乏しい。いかに早く結婚・出産してもらうかがカギであり、社会全体で結婚や出産・子育てを盛り上げる機運が必要である。

そこで、子育ての魅力の発信はもとより、今流行りの“婚活”^{” こんかつ ”}の支援など、“育てる男”の目線で、次世代の育成を図りたい。

- ①子育てへの不安を払しょくさせるため、子育ての楽しさやかっこよさをアピールできる一般参加型のファッションショーやナイスパパフォトコンテストなどのイベントを開催する。
- ②子育てを通じたスキルアップや子育て中の様々なエピソードを活用した婚活イベントの実施など、桐生市で子育てしたいと思ってもらえるような仕掛けを作る。
- ③講師を企業に派遣しワークライフバランス等について出前講座をするなど、若者の将来設計を支援し、次代を担う若者向けに将来を見つめなおす機会（将来への準備）を提供する。
- ④出産年齢を引き下げるインセンティブとするため、出産の時期に応じた人生設計に及ぼすメリット・デメリットを示し、女性だけでなく男性にも伝える機会を設ける。

(2) 地域の活性化 3項目

桐生市は、首都圏と一定の距離を有していることから独自の自然環境・文化・芸術・産業が形成されており、グリーンツーリズム・エコツーリズム・文化観光・産業観光・ヘルスツーリズム等の多くの子育て環境に適した潜在的要素を持って

いる。きっかけ次第で、こうしたニューツーリズムは、地域活動として自ずと浸透していく土壌があり、更に生活圏を共にする両毛地域と連携が図れれば相乗効果も期待できる。

そこで、“育てる男”の目線を強く意識し、主に余暇を利用した父と子を対象に絞り込んだ、桐生市ならではの産業の育成や観光の推進を図るとともに、取組みを促進するためのイベントを企画し、交流人口の増加を図りたい。

- ①子育てをしながらでもできる旅行プランを提案し、桐生市にある鉄道や観光施設、宿泊施設の活用により地元経済の活性化に繋げる。
- ②青少年野外活動センターを拠点に、都心部の若い親子に向けて、山登りや魚釣りの体験、桐生が岡動物園や昆虫の森での生き物とのふれあい体験、近代化遺産や古民家宿泊など、山、川及び古い町並み等を活かした里山生活をイメージしたイベントを企画する。
- ③古くからの織物産業等で培った芸術的な要素を取り込んだ、文化・芸術関係の体験施設や、技術的な指導をできる豊富な人材を活用した、父と子の新たな体験型イベントを企画する。

Ⅱ 実現に向けて

1 「子ども条例」を制定する。

次世代を担う子どもが健やかに成長できる環境を社会全体で実現するため、市民・事業者・市の責務や配慮指針等を盛り込んだ、「子ども条例」の制定を検討すること。

また、昨今、大きな社会問題となっているいじめや児童虐待等の問題に関して、市や学校、保護者などの責務を明確化する条例や施策等を検討すること。

2 子育て全力支援体制を構築する。

・「子ども」及び少子化対策に関する窓口の一元化及び総合的な施策の実施に向けて、専門特化した部署を新設するなど、分かりやすい市役所を創ること。

・多くのパパを巻き込めるシステムと気軽に参加できる入口づくりのため、内輪だけではないプラットフォームを創ること。

3 具現化のため、予算を重点配分する。

行財政改革が進められる中、効率性が優先されがちだが、重点施策として、施策の質や効果を重視して、周囲が驚くくらいのインパクトのある予算を重点的・集中的に投入すること。

4 既存の資源・資産をフル活用する。

地域に愛着や誇りを持ってもらうため、サービスの格差や無いものねだり施設に目を奪われることなく、自然・文化・人など独自性・地域性のある既存の資源・資産を最大限に活用すること。

なお、K I P（桐生市イクメン・プロジェクト推進チーム）など子育て支援団体等も既存の地域資源として、各種のイベントや地域活性化の仕掛けなどの様々な場面に参画（委託）させること。

5 「桐生市キッズバレー（Kids Valley）構想」を宣言する。

子育て支援というと経済的負担の軽減や安心して子育てができる環境整備のための施策など、福祉的な側面を指すことが多いが、桐生市キッズバレー構想は、福祉面だけに捉われず、産業経済の発展も同時に迫及する。

子どもにまつわる事業を生み出し、起業家・社会起業家を育て、企業誘致も行う、シリコンバレーのキッズ版である。集積した企業群には、桐生の子ども達への社会的責任を積極的に果たすことを条件とした優遇策を検討するなど、安全安心なまちづくりと地域経済の活性化の両立を目指す。

このキッズバレー構想のもと、産官学民の連携強化と、幅広い分野での総合的な取り組みを実施することで、桐生市のブランディングを実現させていこうとするものである。

Ⅲ おわりに

約2年間の桐生市イクメン・プロジェクト推進チーム（K I P）の活動において主に2つの成果があった。ひとつは、官民協働体制がうまく機能したこと。ひとりひとりのネットワークやスキルを活かした適切な役割分担を行い、スピーディに事業を展開することは、忙しい子育て世代でも、やり方次第で課題を解決することができることを証明した。もうひとつは、子育て中の父親が交流し、議論する場を持てたこと。子育てに関する事業を当事者が議論して政策に反映することは、市民であるわれわれ自身の主体性を発揮させる効果があると同時に、行政にとっても外部からの刺激となりイノベーションを生み出す効果があることを証明できた。

「イクメン」という言葉に関しては、その受けとめ方や解釈など、人それぞれ様々な思いがあろう。現に「イクメン」の現場に身を置く我々も、型にハマった捉え方など必要なく、その言葉自体も時代とともに形を変え、進化したりするものだと考えている。当プロジェクトで実施させて頂いたセミナー等の講師やゲスト、そしてお迎えしたスピーカーの方々からは、「イキメン」や「チクメン」、「オクメン」といった進化形の表現を聞くことができた。今回の桐生市キッズバレー構想は、まさにその進化を反映させた形になっている。キッズバレーと謳うのであれば、その分野の最先端である必要があり、パイオニアとして他の都市の追随を許さないくらいブッチギリの一番になる必要がある。

以上のことから、今後もK I Pのような組織が次世代の育成や地域の活性化にとって重要であるとの考えの下、人選や事業内容を含めて議論の余地は多いが、今後の組織形態については、プロジェクトごとに各分野から集めた少数精鋭の人材を中心に企画・運営を行い、さらに必要であれば組織を解散させたり進化させたりさせるフレキシブルな組織が理想であるとする。また、広範にわたる各プロジェクトを統括するため、現在のK I Pを進化させて、総合政策部の所掌とし、今回の提言内容の進捗状況の確認や実現をサポートする体制の構築を提案したい。

“育てる男”が“^{まち}桐生”を変える。

子育てをしている男性をはじめ、女性も若者もお年寄りも、すべての人達が「街を育てる」ことで輝きを増す。

20年後の桐生市は、我々の子ども達の世代が中心になっている。

そのときに後悔しないよう、いまこそ知恵を出すときである。

今の負担をコストとして捉えるのではなく、将来への投資として、いま出来るだけのことを多くの人たちの協力で精一杯頑張ること。その姿を今の子ども達に見せられれば、20年後の桐生市は面白い街になるだろう。

最後に、この提言書をきっかけに今後の桐生市がますます良い街になることを願うとともに、我々にこのようなユニークな活動と語り合い学ぶ場を与えて頂いた御関係の皆様に深く感謝申し上げたい。

リーダー 松平 博政
サブリーダー 森下 径一郎
井田 泰彦
大澤 善康
太田 徹
津田 貴久
平野 勝
細井 一
森山 享大
山本 雅幸